JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

目次

74回、75回、76回スウェーデン研究連続講座

74回
スウェーデンの大学教育と研究活動　アンデーシュ・カールソン

75回
福祉の国の音楽文化　加勢　園子

76回
極東への北極航路　グニラ・リンドベリ＝ワダ

スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

さよならニッポン――ある外交官の思い出　ヨアキム・ベルイストロム

スウェーデン王立工科大大学院に短期留学して　篠塚　明子

論文

経済大国中国とその直接投資活動　中村　北斗

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所　所報
No.344 2008年09月30日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階
連絡事務所
〒124-0024　東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail：sweden@tkm.att.ne.jp
URL：http://www.sweden-jiss.com/index.html

発行人・編集責任者：林壮行
Publisher&Editor in Chief : Takeyuki Hayashi
編集者：久保田健司
Editor : Kubota Takesh

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

第74回　スウェーデンの大学教育と研究活動　　日本とスウェーデンの学術交流の現状

スウェーデン大使館科学技術参事官
スウェーデン王立工科大学量子物理学教授
アンデーシュ　カールソン

「スウェーデンの企業競争力は日本より上位にある」

スウェーデンと日本を比較すると両国とも知識ベース型の社会であるが、日本は人口がスウェーデンの14倍であり、研究予算は10倍の規模である。1950年以来のGNPの増加を見ると、両国は米国などとともに急成長しており、しかもこれは労働時間の短縮の中で起きており、生産性の向上が伺われる。企業の競争力でスウェーデンは日本より非常に上位にある。また技術力の指標はスウェーデンは世界一である。

スウェーデン企業は世界各国で活躍しており、例えば古い大企業ではEricsson, ABB, ALFA LAVELがあり、一方新しい企業は数が少ないがKazaa, SKYPE, Coding Technology, Micronic, Autolivなどがある。新しい企業が少ないことは日本も同じで、この点が問題であり、新規事業を起すことが必要である。

「近年のいくつかの問題点」

またスウェーデンは開発努力をしているにもかかわらず、ハイテク製品の歩留まりが低いことも問題である。米、日、アイルランド、フィンランドと比べて効率が悪い。スウェーデンはノーベル賞を28個受賞しており、日本の12個より遥かに多い。この点ではスウェーデンは科学立国といえるが、近年の受賞について見ると2000年の医学賞のみで非常に低調である。

スウェーデンのITに関する指標を見ると、R&D（研究開発）システムは標準レベルであり、企業風土などの競争力は上位で、ITプロセスも上位であるが、他のOECD諸国と同様に、科学に関する関心が薄れてきていることは大きな問題である。その一方でITに関しては、日本と同様に新しい物好きで、インターネットでの銀行取引や携帯電話が普及している。

「スウェーデンのR&D（研究開発）の現状」

科学の目的を歴史的に見ると、1950年代、1960年代には戦後の発展のベースとして用いられ、1970年代には環境問題・石油危機などに対する問題解決手段として使われ、1990年代には各国の戦略的分野を展開する競争の場となった。2000年代には、気候変動などグローバルな問題を解決する手段となると思われる。

スウェーデンの科学の成功は、戦後長期間首相を務めたターゲ・エアランダー氏による「科学は発展の原動力だ」という政策によるものである。彼は「最近の自然科学、医学、工学は信じられないほど発達していて、貧困問題さえなくすことができるほどになった。このような大きな発展は、ガリレオやニュートンの時代以来のことである。スウェーデンも遅れをとってはならない」と、日誌に書いている。

「必要な産・学・官の協調」

スウェーデンはGDPに対するR&D予算の割合が世界のトップレベルで、2005年には1%となっていて、このほかに企業がこの3倍を投じている。スウェーデンのR&D予算には、企業と政府の二系統があるが、両者間での連携はとれていない。今後、EUなど外国からの研究費投入が増えると思われる。

研究のタイプを分類すると、ニールスボーア型の基礎研究、エジソン型の実用化研究、その両方にわたるパスツール型の実用化基礎研究がある。スウェーデンではシステムは大学指向になっている（ニールスボーア型）。大学の風潮は実用性指向ではない（非エジソン型）。学際的研究は行われにくい（パスツール型でもない）。日本と同様にスウェーデンでも産・学・官の協調の必要性が論じられているが、国レベルと地方レベルともに三者が連携を取ることが重要である（トリプル・ヘリクス）。

「政府と研究機関の関係」

政府機関は、起業のための資金の融資などを更に充実させるべきである。また研究機関側では、政府に対して研究成果の価値を十分説明することも必要である。スウェーデンでは大学教授も学生も起業に熱心で、そのためのプログラムもある。知的財産は研究者に所属する。また事業育成、知的財産管理、立ち上がり資金などのサポート体制も整っている。スウェーデンではR＆Dシステムに関して、終身呼称制度、資金源の数、研究の国際化などの見直しが始まっており、今年11月には新法案が提出されることになっている。

「スウェーデンの教育制度」

スウェーデンでは9年の義務教育の後、ほとんどが高等学校へ進み、またかなりの生徒が大学へ行くが、教育制度をボローニアモデルに適合させようとしている。スウェーデンの大学の数はこの十年で増えてきていて、東京よりは少ないが人口の割には多くなっている。

スウェーデンの教育制度、最大の問題は小中学校の教育である。科学に関して、掛けた教育費に対する学習到達度（成績）を15歳の生徒について比較すると、日本の方がスウェーデンより効率が高く、隣国フィンランドは更に高くなっている。授業時間数を比較すると、フィンランドは最少になっている。フィンランドの好成績は、授業時間数によるものではなく、自由なカリキュラム編成、学習に対する関心と平等、安定で安全な学校環境、しっかりした教師教育によるものである。スウェーデンもこれを見習って「基本に返ろう」としている。

「日本とスウェーデンのコラボレーション」

日本とスウェーデンのコラボレーションは、フローラ・ジャポニカを書いたカール・ペーター・ツンベリまで遡る。現在は相互研究合意書があり、ス　ウェーデンのVINNOVAと日本のJSTとの協力など多くの研究交流が行われている。

政治家などからR＆Dの価値について尋ねられることがあるが、具体例として、ビヨン・ブロベリが1994年頃、東京工大で取り組んでいたレーザー技術の研究成果を基にして起した、ALTITUNという従業員40人の会社が、2000年にはカナダのADCに十億ドルで買い取られたことを話すことにしている。技術の成熟まで時間は掛かったが、その価値は十分あった。

私たちの科学技術部では外務省、貿易公団、投資部などと密接に連携しており、ネットワークやキーパーソンを通して、開発状況を把握・分析してそれを関係部門にレポート、ニュースレター、セミナーなどの形で広報するという活動をしている。この触媒作用により、両国間の交流が促進されることを希望している。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

第75回　福祉の国の音楽文化　ー　独自の音楽療法と教育システム

日瑞音楽留学基金理事長
加勢　園子

私（加勢園子）は、20年スウェーデンに住み、音楽の教師として音楽を教える一方、日瑞音楽留学基金の理事長として日本からスウェーデンへ音楽留学を目指す学生のお世話をしている。またスウェーデンで開発された自閉症や知的障害などの患者に対するユニークな音楽療法の普及にも務めている。

本日は,私のこの経験を踏まえ、スウェーデンの音楽に関する話題の中から「スウェーデンの音楽の歴史」、「スウェーデンの音楽教育事情」、「脳機能回復促進音楽療法」の三つのテーマを選び、CDの音源やビデオの影像を使いながら順次お話ししたいと思う。

「スウェーデンの音楽の歴史」

スウェーデンの音楽の歴史は古い。ヴァイキング時代から非常に多くの民謡や北欧神話物語、詩、唱が存在し、人々に歌い継がれてきた。1000年頃スウェーデンにキリスト教が入ってくると、それにともなって外国からの影響を受け、ドイツとスカンジナビアの特徴をもつ独自のスウェーデン音楽が生れた。

音楽は主として吟遊詩人達によって作られ、彼等の歌やニッケルハルパのような民族楽器の演奏によって国中に広められた。吟遊詩人の中でも特に有名なのが18世紀に活躍したカール・ミカエル・ベルマンで、宮廷と庶民の双方で人気を博した。彼の唱は今でもスウェーデン人に好んで歌われている。（CD）

いわゆるクラッシックといわれる分野の音楽は17世紀から18世紀にかけて、王宮を中心に宮廷で発展した。この時代の王達は、伝統的に音楽など宮廷文化の充実に心を砕いたのである。

スウェーデン生れの最初の古典派の作曲家はヨハン・ヘルミク・ローマン（1694－1758）で、彼はヘンデルに学び、スウェーデンのヘンデルと言われている。彼は演奏家、指揮者としても活躍した。（CD）

グスタフ三世（1746－1791）が王位につくと、王は音楽、演劇、美術等の文化面に大きな興味と理解を示し、その普及に力を入れた。音楽面では世界で初めて王立音楽学校を設立し、ドロットニングホルムの宮廷劇場では最高のオペラ、バレエなどを上演させた。グスタフ三世のもとで活躍した作曲家にはマッテン・クラウス（1756－1792）がいる。クラウスはその短い生涯に非常に多くの交響曲、オペラ、教会音楽等を作曲した。彼は天才であり、スウェーデンのモツアルトと言われている。（CD）

グスタフ三世は多くの音楽家を育て、スウェーデン音楽の基礎を築いたが、1791年オペラ劇場で暗殺された。この暗殺事件のいきさつは、ヴェルディ作曲の「仮面舞踏会」という名前のオペラになって今でも世に広く知られている。

時は下って西欧音楽史でロマン派の時代に入ると、スウェーデンにはフランツ・ベルヴァルド（1787－1861）という作曲家が現れる。ベルヴァルドも天才的な作曲家で、1800年代のダヴェンチと言われている。彼はスウェーデン最高の作曲家と言われ、スウェーデン放送局の新しいコンサートホールはベルヴァルドホールと名付けられている。彼は交響曲は4つ作ったが曲想はメンデルスゾーンやシューマンを思わせる。（CD）

19世紀にはスウェーデンでも音楽ナショナリズムが盛んとなる。この時代の有名な作曲家といえばヒューゴ・アルヴェーン（1872－1960）、ウィルヘルム・ステンハンマル（1871－1927）であろう。ステンハンマルはスウェーデン的情緒に溢れた曲を多数残した。彼の作品は交響曲もピアノ曲も、いつまでも聞いていたいような美しい曲揃いである。（CD）

時間の都合で、歴史はそのごく一部しか紹介できなかったが、スウェーデンの作曲家の曲は、どれも自然に調和し、透明感があって心を和ませる美しい曲が多い。

「スウェーデンの音楽教育事情」

歴史的にみると、スウェーデンには、誰もが同等の自由と、学ぶ権利を持つべきとする自由主義の政治思想が19世紀初頭に到来した。この思想に基づき、議会は各コミューンが全国民に対する読み書き計算を学ぶ学校を設立す

ることを決定した。この考え方が文化面にも広がり、スウェーデンでは誰でも音楽や演劇を学ぶ権利があるという考え方に?がった。こういう背景があって、1960年からスウェーデンの各コミューンは、誰にでも開かれた音楽学校をもつようになった。今はどこのコミューンも音楽学校をもっている。

このコミューンの音楽学校では、望む人は誰でも好きな楽器（声）で音楽の授業を受けることができる。学費は無料である。

このコミューン立の音楽学校では、生徒は自分の好きなスタイルの音楽を、自分のペース（個人レッスン）で学ぶことができる。ただコミューン音楽学校で学んだ生徒達は、ほとんどが音楽を職業とはしない。本当に音楽が好きで、音楽の才能のある生徒はプロを目指して更に上の専門の音楽学校に進むことになる。

今スウェーデンは、ポップスからヘービーメタルロックを含めて、アメリカ、イギリスに次ぐ世界第三の音楽輸出国であるが、このスウェーデンの音楽文化の高さの背景には、コミューン音楽学校の、若い人々へ与える影響が大きいとされている。

「脳機能回復音楽療法」

本日の講演の最後のテーマFMT脳機能回復音楽療法についてお話ししよう。

FMT脳機能回復音楽療法（以下FMT）は、知的障害、自閉症、注意欠陥、多重性障害など脳の発達障害をもった人の治療、改善に有効な療法で、1970年半ばにスウェーデンのラッセ・イェルム氏によって開発された。FMTは治療手段として音楽を使うので、いわゆる音楽療法の一種という印象を与えがちであるが、実際は一般的な音楽療法とはかなり異なる非常にユニークな特徴をもった音楽療法なのである。

音楽療法というと、一般にはグループの患者を対象にして、セラピストが患者と一緒に音楽を鑑賞したり、演奏したり、歌ったりする形が多い。そのような活動により音楽がもつ本質的な魅力（力）が人々の心の奥に訴えかけ、それが患者の身体や精神に対してポジティブな効果をもたらすという考え方によっている。すなわち一般に音楽療法というと、音楽が精神に働きかける力を活用したセラピーというイメージが強い。

これに対してEMTはかなり異なった音楽療法である。どこが異なるのかと言うと、EMTというのは音楽を手段とした神経筋肉的な動作療法のなのである。どのような治療なのか治療の実際をビデオの映像を使って見てみよう。

（ビデオ映像）

- 患者（7～8歳の少年）が打楽器（太鼓、シンバルなど）を置いた部屋に入ってくる。
- セラピストは彼に何も指示せず、自由にさせておく。
- 少年は、ふと興味をもったのか太鼓・シンバルの前に座る。
- 彼に太鼓のバチを与えると、勝手に太鼓を叩き出す。
- するとセラピストは太鼓に合せてピアノを弾き出す。
- ピアノの音楽は曲というよりも、イェルム氏が考案したコードのようなものとか、ごく短いフレーズである。
- 患者はそのピアノを聴いて、自分も何かしたいという気が起り、ピアノに合せて太鼓やシンバルを叩く。
- 太鼓やシンバルを叩くと、その音響震動が患者の腕の筋肉や神経に伝わり、それが脳に伝わる。
- それを繰返すことで、脳に記憶のトラック（航路）ができ、脳の機能が正常の方向へ動き出す。

ビデオ映像の例からFMTのイメージが掴めたと思うが、つまりFMTは音楽の響きを使って神経筋肉を活性化させ、それを通して脳に刺激を与え、機能の回復を目指す方法なのである。この方法では、患者が自発的に鳴らす音（音楽）の振動が重要な役割を果たすので、セラピストは患者と1対1で対応するが、患者と言葉を交すことはないし、指示もしない。患者とアイコンタクトもしない。こういうところが一般の音楽治療とは大きく違うところである。

FMTの考え方は、人間の発達理論に基づいている。人間は生まれたときから運動性、知性、感情、知覚の4つの要素が互いに協調し合いながら、年齢に応じて段階的に発達してゆく。この発達過程で、何らかの原因で4要素の協調バランスが崩れると脳の機能に障害を起こす。

FMTは音楽（音）で神経筋肉の動作を活性化させ、それによって脳の機能の不均等をバランスのとれた状態へと働きかけ、脳を正常な状態へ回復させるよう働きかける。それによって運動性や、知的、感情的な面を含む全体の発達を促進させるという理論にもとづいた治療法なのである。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

第76回 極東への北極航路 ― スウェーデンのベガ探検隊の明治日本への訪問

グニラ・リンドベリ＝ワダ
ストックホルム大学日本学部主任教授
国際日本文化研究センター外国人研究員

明治12(1879)年9月2日に、スウェーデン国旗を掲げた蒸気船ベガ号は横浜港へ到着した。鉱山学者及び探検家アドルフ・エリック・ノルデンショルドを隊長に、30人の北極探検隊は、北東航路を通り北部欧州から日本への航海に成功し、世界的なセンセーションを起こした。北東航路を通っての日本への旅、ノルデンショルドの目に映った当時の日本、彼が日本で購入した多数の古書のコレクションなどを中心に、話を進める。

「フィンランド生まれのスウェーデン育ち」

A・Eノルデンショルドは1832年フィンランドで生まれ、貴族階級に属し、スウェーデンで育った。貴族階級の人間は国民の約6パーセントで、彼らはスウェーデン語を話し教育、商業、国家機関など枢要をしめていた。フィンランドは階級社会で1866年までは国会も4つの階級制度があった。

しかしながらノルデンショルドは、そのリベラルな言動が煽動的とロシアから目を付けられ、スウェーデンに亡命した。鉱山学者でもあり探検家でもあったノルデンショルドは1858年に1回目の航海に出かけ、スピッツベルゲンまで行った。68年には自分の探検隊を組織、動植物や鉱石の調査のためにグリーンランドなど10回の旅行をした。その間に地理学や物理学などの学術調査を行い、北米ルートの探査、北海の氷結の状況を調べて、きたるべき探検旅行の準備をした。

「オスカル二世がスポンサー」

探検旅行には莫大な費用がかかる。ノルデンショルドは72年、国王になったオスカル二世をスポンサーにした。乗組員は30名で、うち15人の研究家は海軍から給料をもらっていた。ドイツから蒸気船「ベガ」を購入。ベガは68馬力で時速10ノット。これに2年分の燃料と食料、アクティブな生活を送るためのゲーム、また栄養をとるためのビタミン剤などを用意して、78年7月7日、スウェーデンのトロムセから出航した。

当初はベガのほかにフレザー、レナ、エクスプレスら3隻も同行。8月10日にベガとレナだけになり、チェリスキン岬で霧のために4日間も足止めを食らい、8月27日にはベガの単独航海となった。ベガは9月28日から翌79年の7月18日まで、ピトレカイで9ヶ月間も氷に閉じ込められた。この期間にチュクチの原住民と出会い、地理などの研究ができた。クリスマスには手作りのツリーを作ったりした。蔵書が1000冊近くあり読書もでき、研究者同士が講演会を行うなどして時間を過ごした。それから6週間、ベーリング海峡で研究調査をし、9月2日に横浜港に到着した。

「予定をオーバーした日本滞在」

日本には8週間滞在したが、当初は船の修理のための寄港で、それほど長期滞在する予定はなかった。横浜ではハマ御殿に招待されたが、家は食堂がなく、別荘のようで、ミニチュアのガーデンがあり、不思議な形をした木があった、公園はきれいだが小さかった、というような感想を持った。9月15日には地理学会のパーティーに呼ばれて勲章をもらった。江ノ島や鎌倉にも足を伸ばした。

ノルデンショルドは火山研究のために群馬県の浅間山に関心を持って、通訳とコックを同行させて中山道を人力車で行ったようだ。コックを連れて行ったのは、日本食が魚くさいので口に合わないからだった。草津では温泉治療法を詳しく調べた。ヨーロッパにはない全裸での混浴はしたが、日本人が座って品評会をしているのには驚いた。旅館は非常にきれいで清潔、ふすまの使い分けで部屋の大きさが変わるのを見て、素晴らしいと思った。浅間山では火口にビンを投げ入れて満足そうだった。碓氷峠の自然は、自分が見た中で一番美しいと感じた。旅行を通じて、日本人の生活ぶりや習慣にも触れて、家具が少ないこと、火鉢やヤカンなどを使っているのを見てユニークだと思った。

「ノルデンショルドが購入した古書コレクション」

日本の文化にも強い興味を持ち、絵本まで含めた古書の収集は多岐にわたった。そのコレクションを紹介する。

歴史	176
仏教及び教育について	161
神道について	38
キリスト球について	1
風習	33
演劇	13
法律	5
政治学、政治のパンフレット	24
詩歌	137
紋章学、古代研究、儀礼	27
戦術及び武術	41
将棋	1
貨幣学	4
辞書、文法書	18
地理学、地図	76
自然学	68
医学	13
算数、天文学、占星術	39
手細工、農業	43
スケッチブック	73
生花（園芸？）	16
書誌	9
雑多	20
計	1036

「アウグスト・ストリンドベルイが古書のカタログを作製」

ほかに、よろい、かぶと、刀剣、かご、家具なども購入。横浜から神戸、長崎に回って、予定をオーバーする8週間の滞在を終え、12月27日、帰国の途に着いた。

ストックホルムに到着したのは翌年の4月28日。15万人が出迎え、中にはスベン・ヘディンの姿もあった。後にシルクロード、チベットなど5度の探検旅行をするヘディンだが、当時は15歳の少年だった。

ノルデンショルドが持ち帰った日本の品々は王宮の中庭に展示された。また当時、アウグスト・ストリンドベルイは24歳で、王立図書館に勤務、中国語研究の第一人者で、蔵書のカタログを作製した。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

さようならニッポン――ある外交官の思い出

スウェーデン大使館 前報道参事官
ヨアキム・ベルイストロム

はじめに

ヨアキムさんは4年間、スウェーデン大使館で報道参事官として勤務。今季で退任し、サウジアラビアのスウェーデン大使館勤務となりました。日本での4年間、JISSはさまざまな協力をしていただきました。日本とスウェーデンの架け橋としてヨアキムさんの功績は多大なものがありました。日本を去るに当たって、この4年間の思い出を話してくださいました。

「不思議の国ニッポン」

「不思議な国」というのが第一印象でした。

1980年、わたしは高校生のときに父親の友人を訪ねて来日。この国を理解するにはコトバが重要と考え、スウェーデンに帰国して日本語を勉強しました。2001年、文部省の奨学生として再度、訪日し、東京大学の博士課程で「メディア研究」に取り組みました。ゼミでは政治、社会、文化研究を履修。在学中にはNHKのラジオジャパンなどで働いていました。「ワールド・プレス・レビュー」(米国版)の特派員として、日本の政治文化についての記事をリポートしたこともありました。

「日本をスウェーデンに紹介したかった」

わたしは日本でスウェーデンのために働く、というより、日本のことをスウェーデンに紹介したい、という気持ちのほうが強かったので、当初はスウェーデン大使館で仕事をするつもりはありませんでした。しかし、日本語ができてジャーナリストで、無論スウェーデンのことを知っていて、彼我の文化に興味をもつ人間は、それほど多くありません。そういう事情もあって、04年からスウェーデン大使館に勤務、報道官として働き始めると、これが実に楽しい仕事でした。

「たずさわった仕事」

わたしの仕事は、日本にスウェーデンを紹介すること、でした。

さまざまなイベントやシンポジウムを企画し、日本のプレスや関係機関に広報する。ジャーナリストを招待して、スウェーデンへのツアーを組む。日本で行われる国際的なイベントに協力する。スウェーデンから訪日するVIPを日本のマスコミにアピールする。公式なものからグラスルーツ的なレベルまで、さまざまな交流を図りました。

わたしが就任した当初、日本のプレスがスウェーデンで注目したのは、やはり年金、社会保障、環境そしてデザイン関係がメインのテーマでした。

それから男女平等とジェンダーの問題、少子化に伴う育児教育の問題などにも大きな関心がもたれました。昨年はジェンダー問題で、スウェーデンからオンブスマン、研究所のスペシャリストを招聘し、日本からは閣僚が参加したセミナーを開きました。

最近ではデザイン関係と環境問題が注目されています。

デザイン関係では家具のイケアに続いて、今年はファッションのH&M(ヘネス・モーリッツ)が日本に進出しました。大きな話題になりましたが、まだ日本におけるスウェーデンのファッション産業は、きわめて小さなマーケットしかありません。スウェーデンには、発想のすばらしいユニークで面白いデザインがたくさんあります。これは大使館商務部との関係もありますが、もっと日本に紹介したいことのひとつです。

「これからの問題は格差社会」

これからのテーマとしては、わたしは格差社会があると思います。

07年くらいから、日本にもワーキングプアという人たちが現れてきました。予想もできなかった事態が起きているの

ですが、これは根本的には社会システムの問題ではないでしょうか。簡単に言って、社会にスウェーデン型とアメリカ型というシステムがあるとして、日本はアメリカ型に移行してきた、といえるのではないでしょうか。いまの格差を考えるとき、日本はスウェーデンの社会から学ぶべきことが色々あるように思います。

もうひとつの格差は男女問題です。働く女性に対して、日本とスウェーデンでは大きな違いがあります。出産や育児と仕事の両立、男女間にある差を埋めるために、どんな手段や方法があるか、スウェーデン社会は参考になるでしょう。

「JISS」

JISS（スウェーデン社会研究所）は、すばらしい活動をしています。日本とスウェーデンを考えるために、さまざまな分野のスペシャリストを招いて、政治経済、社会文化におよぶテーマを取り上げ、毎月、スウェーデン大使館で貴重な講座を開催しています。この研究活動を通して日本とスウェーデンの相互理解が深まり、それがよりよい社会を築くために大きな貢献していると考えます。

「スウェーデン語教室」

また、同時に強調したいのは、JISSがスウェーデン語教室を開催していることです。わたしも日本語を勉強して、英語では分からない日本語固有の表現法があることを知りました。それはスウェーデン語でも同じです。スウェーデン語を知らなければ理解できないことがあるのです。JISSの教室には実に優秀なスタッフがいます。ひとりでも多くの日本の方がスウェーデン語を勉強し、スウェーデン社会を理解してもらいたい、と願っています。　（談）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

スウェーデンの大学院・都市計画講座を受講して

スウェーデン王立工科大学 大学院
School of Architecture and Built Environment
Urban Planning and Design
篠塚 明子(留学生)

はじめに

2007 年8月からスウェーデン王立工科大学(以下KTH)のマスターコースに短期留学中で、現在9つある学部のうちSchool of Architecture and the Built Environment の Urban Planning and Design(以下UPD)に所属している。2007年秋、UPD のプログラムである「UrbanismWorldwide(以下UW)」を受講した。ヨーロッパは9月から新学期なので、主に大学院1年生がこのクラスを受講する。このクラスはUPD の他Spatial Planning コースの生徒も受講出来るので、都市計画分野の学生にとっては一般教養と言える。しかし、ただ知識を身につけるのではなく、今後論文を書くための比較分析の仕方や、社会に出て実践で役に立つ基礎的な訓練も兼ねているのが特徴であると思う。現在スウェーデンは授業料が無料であり、更にKTH はマスターコースのほとんどは英語で授業が行われるため世界各国から学生が集まっている。KTH の学習環境やこの様な環境で学んだ「UW」について授業の目的とシラバス、講義、プロジェクト、セミナー、その他試験などを紹介したいと思う。

学習環境 ～教室、学内公共スペース、インターネット環境など～

メインキャンパスはセントラルステーションから3駅目とは思えない好立地である。スウェーデンと言えば森と湖というイメージが出て来るように、教室の窓からパチンコ、ゲームセンターそして居酒屋のネオンが見える事はなく、場所によっては見渡す限りの樹海が広がりパソコン作業で疲れた目を休ませるのにも十分効果的だ。校内をジョギングする姿もよく見られる。

KTH 学内はどこでも無線LAN でインターネットにアクセス可能である。生徒にはパスワードが与えられ在学期間利用可能で、これは日本も同じであろう。日本の大学もパソコン環境は十分整っていると思うが、KTH はBilda という学内ネット環境が整っており授業でのBilda 利用頻度が格別高い。そのためコンピュータールーム以外でもノートパソコンがあれば課題ができ、様々な場所でグループワークに取り組む生徒を見かける。UPD のプログラムに限らず他学部も少人数でのグループワークが多いようで、3～5人で図書館のカフェや学部専用のカフェ、あるいは中庭の芝生など教室以外で勉強している生徒が多い。また生徒一人当たりの公共スペース、特に自由に使える大きな机や談話スペースが面積体積共に十分確保されている。

授業の目的とシラバス

KTH では全ての授業概要を誰でも閲覧する事が可能で「授業の目的」はもちろん、その授業を受講すると「どのようなスキルが身に付きその後どのように役立つか」という事が具体的にはっきりと示されている。受講後に自分がどのようになれるかを始めにイメージ出来るのは学習意欲が沸き、客観的に観るならどのような生徒を育成したいかという大学の方向性が理解できて非常に明快だ。コースが終わると必ずそのコースに対する評価が行われる。評価項目は大きく分けて、採用教科書について、講演者とその講義内容について、クラスの雰囲気についてなど。

UW の目的は、「学生に伝統的な都市計画パターンの主な特徴と、アフリカ、アラビア諸国、東アジア、アメリカ合衆国そしてヨーロッパの近代的都市パターンの特徴を熟知させる事。そしてこれら都市と経済的、社会的、文化的影響、政治的な慣例や歴史を通した制度とのつながりを学生に熟知させる事。この講義の終了後には、学生は都市における市街地開発と地方の主な違いの比較や議論、また都市生活や都市文化における具体的な影響の比較検討もできるようになる。」とある。またホームページには掲載されていなかったがUW では都市パターンを空から眺め視覚的な違いを把握するためにGoogleEarth を活用する事を勧めている。

UrbanismWorldwide（Period 1：2007 年8 月31 日～9 月25 日）
担当教授＊：Bosse Bergman, Teaching Assistant＊：Camilo Andres Calderon Arcila
講義：56 時間, セミナー：24 時間, プロジェクト：12 時間
単位数：プロジェクトワーク,4.5 単位, 試験,3 単位　計7.5 単位
教科書：The Modern City, Planning in the 19th Century.
Choay,Francoise. 1969（コピーを配付）
：Cities of the World – World regional Urban Development, Third Edition,
Brunn, Stanley. Williams, Jack. Ziegler, Donald. 2003, 519page（635SEK）
＊ 担当教授とTA は毎年変わる。授業内容も講義後の授業に対する評価によって見直しがされる。

授業の進め方は、毎週課題が一題出され、講義を月火で行い続いて水木が課題のプロジェクトエクササイズ、そして金曜がまとめのセミナーとなっており計4課題＋試験で講座終了となる。プロジェクトは3人一組のエクササイズグループ（E グループ）に分かれ作業し、セミナーでは6～7組のE グループごとにセミナーグループ（S グループ）を構成し、3つのS グループに別れプレゼンテーションを行う。S グループのプレゼン後は全員一つの教室に集まり、TA によって学んだ箇所について分りやすくまとめた概要が配られ、重要ポイントを各自確認したあと課題のまとめを行う。

講義／ガイダンス／オリエンテーション
月火の午前9時から午後5時までが世界の都市パターンや交通網、その他歴史的背景や産業革命の影響などについての講義だ。講義スタイルはパワーポイント（以下PPT）によるプレゼンテーションで、教授以外にも学外の専門家を招いたり、ドクターコースの学生も講義を行う。更に驚いた事には、担当教授とTA の提案でタイムテーブルを急遽変更してクラスメイトも講義を行うなど、積極的な姿勢が見られた。生徒による講義は、エチオピア出身の学生による首都アディスアベバの都市計画と、ミラノの観光地再開発計画に携わった学生のプレゼンテーションであった。講義に使用したPPT データは授業終了後ただちにBilda にアップされ、各自自由に閲覧する事が出来る。

このコースが始まる前、ガイダンスとバスオリエンテーションがあった（Week35）。午前のガイダンスは留学生のみの参加でスウェーデンスタイルのフィーカタイム。テーブルにはコーヒー紅茶と菓子パンなどがたくさん並べられたアットホームな雰囲気の中、担当教授が簡単にコースの概要とKTH について説明し、学生は名前と出身国の紹介をした。午後のガイダンスは全員参加で、コースについて講義の目標や今後のスケジュール、グループワークの進め方を説明するだけでなく、昨年UW を履修した学生の評価を紹介し今年度はどのように改善するかも示された。評価内容の例をあげると「コース自体内容が多く時間割もきつかったので、教科書を読む時間や復習をする十分な時間がなかった」「プロジェクトの時間が少なすぎる」「Bilda にアップされるのが遅い」など。それに対してUPD 教授陣は「学生の評価をみて分る通り欠点はあるが、UW は都市計画の学生のための入門講座で、重要かつ刺激を与える役割を担っている。この後に続く講座をより容易にこなして行くためには、この内容は必要不可欠である。」という事で、今年度もかなりのハードスケジュールに変わりはなかった。しかしBilda には授業後すぐアップロードされていたし、資料や使いやすさ、講義内容の見直し、その他TA のフォローアップなどは非常に良く評価結果の改善が見られた。

バスオリエンテーションはコース開始前の日曜日にバスを貸し切り1日かけての昼食付きバスツアー。スウェーデン初のニュータウンや学園研究都市、環境配慮型都市を先生のガイドで見学した。また別の日にはストックホルム市内の近代的建物の並ぶエリア、日本で言う丸の内エリアでウォーキングツアー講義が行われた。教科書やインターネットでも情報を得る事が出来るが、やはり当たり前だが実際にその場に訪れるほうが人々の賑わいや、そのエリアの雰囲気を体験でき印象に残る。

プロジェクトとセミナー
課題1　My hometown (Week36)
課題2　Worldwide City (Week37)
課題3　Urban Worldwide Problem (Week38)
課題4　Pasting a 'Worldwide' Area in Stockholm (Week39)

Eグループメンバーは3人で、出身国エリアがかぶらないように決められる。課題1 ～4はコースの始めに渡されるので、最終的に何をしなくてはならないのかを念頭に置きながら課題に取り組む。またセミナーではEグループメンバーは必ず1回プレゼンを行う。全ての課題は期限内にBilda にアップロードする。

課題1：My hometown
自分の出身地についてE グループメンバーはPPT を作成し、メンバーに紹介する。

そして3人の出身地について、都市パターンや都市交通、人口密度などについてどのような違いが見られるか、といった比較をしてさらにそれをPPT にまとめセミナーで発表する。自己紹介と練習を兼ねたプレゼンテーション。

課題2：Worldwide City
Eグループの出身国エリアとかぶらない世界の都市で、教科書に載っている都市を一つ選ぶ。今後その都市がE グループのプロジェクト対象地となり課題をこなしていく。例えば私のグループはスウェーデン、ボツワナ、日本だったので中央アジアかアメリカで選ぶ事になりTA と相談した結果、インドのシャンディガールがプロジェクト地となった。課題2では対象地の主な都市の特徴を捉え分析し、15 分のPPT にまとめセミナーで発表する。与えられたグループワークの時間は2日。インターネットや書籍で情報を収集するが、この課題は短時間で出来るだけ多く情報を集めいかに分りやすくまとめて発表するか、という狙いがあるようだ。一日でPPT のアウトラインを作りまで進め、後日TA に一度見せてから修正箇所や疑問点を話し合い完成させる。PPT データは期限内にBilda にアップロードして提出する。セミナーでは各E グループがそれぞれの都市について発表し、初めて見る他グループの15 分プレゼンで自分たちの足りない部分や見やすいスライドについても学び次回に生かす。

課題3：Urban Worldwide Problem
都市における問題点（例えば住居や公共スペースの不足、交通計画、都市景観など）を見つけだし、その原因と解決策を15 分PPT でまとめ、他のE グループの都市と相違点、類似点、解決策などを比べてセミナーで討論する。後半のセミナーは全体で行い、黒板に全てのE グループが都市の特徴を簡単なイラストで示す。簡略化された都市パターンを描く事でイメージをとらえる事が出来る。時々TA が講義の中から参考になるプレゼンをアドバイスしてくれて、講義と課題を切り離さずに課題に取り組む事ができた。グループワークの時間に課題4で与えられるストックホルム内の二つの敷地を各自見学に行く。この敷地はそれぞれ異なる特徴を持つので、どちらを選ぶかを念頭に置きながら現地見学を行うのがポイントである。

課題4：Pasting a 'Worldwide' Area in Stockholm
与えられたストックホルム市内の二つの敷地のうちどちらかを選び、そこにEグループの都市をあてはめ、15 分PPT を作成。それによってどのような問題が起きるか、あるいはマッチするかなどを考え、どのようなプランが新たな都市計画を行う際、適するのかという予測がつけやすくなる。S グループでの発表後、計画したエリアをA3 のポスターにまとめ、最後の全体セミナーでポスターセッションを行う。

その他
筆記試験
9月28日（金曜日）　午後1時～5時
辞書（電子辞書を除く語学辞書）持ち込み可
食べ物（サンドイッチやバナナ、リンゴなど食べやすいもの）、飲み物持ち込み可
事前にインターネット試験か従来型の筆記試験のいずれかを選ぶ。

クラスの様子
スウェーデンは社会人経験のある学生が多いと聞いていたが、それほど多くはなかったように思う。しかし結婚していて子供もいる生徒が何人かおり、講義以外のグループワーク時間には子供をコンピュータールームに連れて来たり、夕方の講義中に子供を保育園に迎えに行く時間だと早退したり、日本では経験した事のない事ばかりであった。また、結婚したばかりで新婚旅行に出かけていたため2週間遅れでコースに参加するという生徒もいたが、その様な事も含め日本以外では当たり前の事の様で、不思議がる学生や文句を言う学生は誰もいなかった。私のグループのメンバーも子供が 3人いて、たまに「子供が熱を出したから学校に行けない」という連絡が来て、彼女は自宅で、私は学校でBilda のチャット機能を使いながら情報交換をしPPT の作成をした事もあったが特に問題なくこなせた。

昨年のコース評価にもあるように、1ヶ月のコースとしては内容量、作業量が大変多く、教科書500 ページ以上全てを読む時間もなかったが、少なからず自分自身成長がみられ、コース終了後の達成感と満足感は格別であった。日本にこの様なカリキュラムがあるかは分らないが、1ヶ月間集中して一つの講座を学ぶ事は、かなり応用力を養う力がつくのではないだろうか。

受講学生の出身国割合
学生の割合は58人中、交換留学生13人／正規留学生28人／KTH（スウェーデン人）17人であり、その多くを海外からの学生が占めている。
Urbanism Worldwide 2007　学生出身国内訳　（単位:人）

	交換留学生	正規留学生	KTH
フィンランド		1	
スウェーデン	1		17
北アイルランド	1		
アイルランド	1		
オランダ		1	
ドイツ	3		
フランス	2		
イタリア	3		
ポーランド		1	
ラトビア		1	
ナイジェリア		1	
エチオピア		3	
ガーナ		1	
ボツワナ		1	
スリランカ		1	
パキスタン		1	
バングラディシュ		3	
日本		3	
中国		9	
オーストラリア		1	
小計	13	28	17
合計		58	

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

経済大国中国とその直接投資活動:スウェーデンと日本に影響があるか

スウェーデン国ヴエックショー大学経営学准教授
中村北斗

鄧小平が1978年に中国経済の自由化をし始めて以来、その国は急速な経済発展を示した。結局として、2006年に中国が台湾を追い越して、国家外貨準備高が世界最大になった。この中、特に注目すべき事は、最近急増した中国の対外直接投資である。

2000年、中国政府はマクロ経済的な圧倒を緩和するために「走出去」戦略を開始した。なぜかというと、このマクロ経済的なプレッシャーは中国経済の経済発展の「裏側」といい、人工的な為替レートや貿易収支黒字がかけたものであり、中国政府は欧米が呼びかけた要求に応じた事といっても良いでしょう。

だが、当初この動きに乗り出したのは大規模な国有企業しかなかった。ポリシーの対象になった企業は国有・私有企業両種だったが、対外直接投資に必要な資本を持っていたのは大体国有企業だけであった。しかし、計画していた結果がなかったため、落胆していた中国政府は国有銀行の中国進出口銀行に個人向けの資本貸し出し利子率を下げる政令を出した。その政令の効果は非常に激しかった。2004年から2005年までの対外直接投資の上昇率はなんと465%だった。

このなかに、日本とスウェーデンに対してどういう影響があるのだろうか。戦後の日本企業の対中直接投資の歴史は大体バブル経済崩壊後以来の話である事、一般に知られているのだろうが、スウェーデン企業による対中直接投資の歴史はほぼ同じ時期に発展し始めた。日本企業と同じように、最初は輸出によって中国市場に入り、その市場が拡大すると、現地で製造を開始するというような動きであった。

しかし、今日の話題は数年前に想像も出来なかった中華人民共和国からの個人直接投資である。個人資産が許されている今の中国では、国内の投資機会が激しい競争の中で少しずつ減ってきた。今の時点では、中国投資家が国内投資対海外投資のトレードオフ分析をし、結果が海外投資の方が有利である事、珍しくないと思う。何故かというと、前に述べた国内市場状況の他、国内の環境問題や海外の市場状況などのために利益が高い事もあるからである。

この点からスウェーデンに対する中国からの投資傾向を調べよう。まず言うべきなのは、中国起源の対スウェーデン直接投資は総額のごく一部だけである。それにしても、この少数の直接投資ケースは非常に興味深いなのである。このグループは大体二つに分けられる。一つは、大型の国有企業と私有会社である。もう一つは私有中小企業である。M&A動機なら「華為」のような大型企業は他の西洋大型企業と変わらない。例の「華為」は、数年間大型リストラを行ったエリクソンの旧従業員を積極的に雇用してきた。理由はもちろんノーハウ知識を確保するためであろう。こいう対外直接投資動機は一般で、世界中に見られる。もう一つの例は北スウェーデンのスウェーグ市にあるバイオテック燃料工場の買収である。このM&Aもノーハウ確保を目的とされ、中国政府が国有会社によって投資した件である。

こういう一般の直接投資目的と違って、去る5年間、興味深い傾向が見られるようになった。それは、上に述べた「走出去」戦略下で行われた中国進出口銀行の個人投資家向けの有利的な資本貸し出しとつながっている発展である。特に二人の人物の投資活動が目立っている。ひとりは2000年ごろ以来、スウェーデンで活躍している。主な資産は自己保有の蚊取り線香工場であり、東中国地域で40%近くのかなりの市場シェアが持っているそうだ。そこから資産をつくり、主にスウェーデンで投資している。なぜスウェーデンを選んだかというと、偶然の話だ。90年代後半に、この男

がボルボ一台を手に入った。その頑固な車がスウェーデンに生産されている事を知り、長年に連絡を取っていない兄弟がその国に住んでいる事を思い出した。電話したら、話がすぐスウェーデンでの投資機会に入った。スウェーデンに投資をしに行く事を決め、到着したら兄弟のビジネス関係に紹介された。今は北スウェーデンから南の方まで中小企業を買収したり資本参加をしたりしてきた。しかし、この中に一番有名になったのはイェーヴレ市のすぐ南にあるエルヴカーレビー市で倒産した市有の観光ホテル設置を買収して「中国村」を作った。この投資はSEK2000万（約34億円）で、主にスウェーデン国内の観光市場を対象しているが、一部は瑞中ビジネス関係を「育つ」役割があると投資家が主張している。設置の位置は首都圏で、コミュニケーションが非常に良くて、来客が多い。

もう一人は極最近に来瑞し、南スウェーデンのカルマー地方で投資活動をしている。2006年にカルマー市から土地を手に入り、中国にある大型商品展覧会をモデルとして「China Europe Business Exhibition Center」という設置をつくる意思であった。目的は中国製品をバルト海圏の商人に売ると言う事で、なんとSEK2億（約340億円）を投資する事をカルマー市長に約束した。計画はこの金額にとどまらず、2、3年のうちにSEK5億を投資する決意を示し、人口6万人のカルマー市に中国人約5000人（展覧会に参加する事業家2000人とその家族）を移住する計画も発表した。驚きながら、この人口急増に対してカルマー市側は言い分も何もなかった。しかし、このプロジェクトに様々な問題があった。まず、商品展覧会の所在地のインフラストラクチャーだ。カルマー市に鉄道線やコンテナ港、空港もあるが、鉄道は低速度単線鉄道、コンテナ港の深さは6mしかあらず、空港も平日のみオープンでストックホルム便しか運行していない小さな地方空港だ。それにしても、著者がインタビューした市役所の責任者が自慢しながら語ったのは、この中国人実業家が所在地にオランダのアムステルダムにするかカルマーにするか二つのオプションがあったそうで、最終的にカルマーを選んだ。インフラストラクチャーの貧しいカルマー市をなぜ大型商品展覧会の所在地にしたか、謎のようだ。つぎはこのプロジェクトに中国国家発展改革委員会（英略NDRC）の資本輸出許可が得ていなかった事が事実でありながら、カルマー市側に事情を説明しなかった。市の責任者はこの事実を最後に分かったらしいが、結局資本がなくなって、現時点では商品展覧会プロジェクトが麻痺状態である。このプロジェクトが将来に実現されるか、今では想像しにくいところだ。

日本での中国直接投資活動はほぼ全て非製造中小企業向けで、投資しているのは個人ではなくて企業である。目的は、対スウェーデン投資と同じように技術やブランドを確保するのだ。この中国対外直接投資の目的は、先進国向け直接投資なら一般的なのである。対日投資活動の歴史は1888年以来という対スウェーデン投資活動よりはるか長い歴史がある。しかし、主な資本流れは1978年以降という事で、M&Aではないグリーンフィールド投資なら67件も記録されているが（源：東洋経済「外資系企業総覧2005年版」）、合併・買収・営業譲渡・資本参加・出資拡大などの対日直接投資なら2004年までに9件しかなかった（源：RECOFマール誌）。このうち、合併は1件しかなかった（残念ながら香港経由の中国会社の直接投資資本は統計に見分け出来ない）。この数字を観照すると、単なるノーハウ確保だけではなく、日本企業と組織的に合併、あるいは主なオーナーになって中国式マネージメント思想を日本組織に注入させる機会が事実的にあるという直接投資はスウェーデンと同じようにまだ非常に珍しい。

目をちょっと上げて、この国際的な対外直接投資を見よう。中国会社や投資家の21世紀における直接投資活動を日瑞両国の経済にどういう影響があるのだろうか。短期的に影響が何もないと思う。なぜかというと、中国会社や投資家による投資資本額は直接投資総計のごく一部だけである。世界レベルで見ても、中国対外直接投資は世界投資流れのほんの一部だけである。しかし、長期的な影響があるかもしれないが、あるならある政治的やマクロ経済的な条件が必要だ。一つは、中国の政治事情だ。世界歴史や社会学・経済学理論が持ち出しているのは一般的な経済発展が庶民の唯物論的な欲望を生み出しながら、そのうちに民主主義を要求している声も上がる。中国の経済発展が将来にどのように共産党の政治独占を挑戦するか不明である。もう一つはマクロ経済である。中国が経験してきた異常な高度成長は、日本が50年代から70年代まで経験したのと似ている。しかし、大きな違いがある。初めに、国の大きさが違う。日本は経済的に均質な国で、経験した高度成長の実りは国民全体に配布された。次に、日本円は変動為替レートで調整され、貿易等による国際収支の赤字・黒字を整理する事が出来た。中国は経済的な民主主義を到達するためのこの二つの重要な条件をまだ満していない。上に述べた「走出去」戦略は肯定的にマクロ経済的なプレッシャーを緩和すると解釈しても、中国の政治・経済ポリシーが全体的に変わらないと「走出去」戦略の結果が事実的に小さいと思う。だから、今の国内事情が続くなら長期的な影響もあるまい。

すなわち、中国直接投資はスウェーデン経済の行方を産業レベルから見ても影響が非常に小さい。日本では、中国の対日直接投資は日本の少子高齢化社会問題と繋がっているから、件数が低くても中小企業の後継ぎ問題の解決手段の一つになれるなら、マクロ経済面で影響がなくてもマイクロ経済的に有利なのである。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2008年09月30日発行 ・・・ 所報No.344

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。
応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1　応募資格
特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受付けません。

2　内容と字数
北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字（程度）、1，600字（程度）、3，200字（程度）のいずれかの文長でお願いします。
（まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい）

3　掲載の可否と掲載時期
掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。
送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4　謝礼
ご投稿への謝礼は無料ということでお願いいたします。

5　原稿の送付先
原稿は、「JISS事務局　所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese